

視点

フレキシブル思考

十文字女子大学名誉教授・越谷保育専門学校参与

平田 智久



【地球規模？】

この夏は雨ばかりです。関東では40年ぶりともいわれています。その雨の降り方も全国共通で局地的豪雨です。強風・雷が加わりこんなことが在り得ない…でも現実のこと、その対応こそ（個人的にも社会的にも）急務です。日本ばかりではなく世界中から伝えられています。科学的なデータ収集・分析は即座に報道されていますがさまざまな被害が発生しています。氷河が解ける、海面上昇、砂漠化が進む、海流の変化、それらに伴って人間がどう自然と向き合うのか…ということはAI（人工知能）を活用しながら人間が対峙していく課題です。種々のデータを活用しながら人間らしく生きるための予測や事後処理できるフレキシブルな行動が必要です。

【保育環境も変化】

地球のそれと同様に幼稚園をめぐる環境の変化もめまぐるしいです。「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」と三本立てで告示されたのは今年が初めてです。時代の変化の中で三省がかかわり‘子ども’を主体にした養護と教育を展開していく環境を整えたともいえます。（同じ年齢なのに幼稚園と保育所でその育ちが変わっていたら変だ…と思っていた小生なので少しホッとしました。）

それらの要領と指針を同時に比較してみると章や項目を超えて「子どもの育ち」や「育てて欲しい姿」など共通した内容が多いのでうれしくなりました。特に〈「保育指針」の第一章総則の4 幼児教育を行う施設として共有すべき事項〉という表記です。保育所は「教育施設」（学校教育法などによる）ではありませんが下線のように“制度”として認定されたこととなります。（「幼稚園と保育所との関係について」昭和38年文部省・厚生省から保育所の3歳以上の教育の部分は幼稚園教育に準じる（要

約）…という通達された以来のことです。）ですから、どの施設であっても子どもが年齢にふさわしい体験を充実して行えることが大事になります。今までの園の歴史や理念を絶対なものとする信念は尊敬しますが、改めて今日的に見つめてみる…というフレキシビリティが大切ではないでしょうか、電話機もスマホになっている時代ですから。

【三つ子の魂】

幼保小連携がますます大事になってきています。小学校の先生方のお話を聞いていると幼児を赤ちゃん扱いにしているようです。その見方は幼稚園の中から見えてくる2歳児にも言えそうです。2歳児はどんどん3歳児になっていることに気づかないのでしょうか。できなくても何でもやりたがる2歳児です。ですから子ども達は生活の中でさまざまな刺激を求めています。ところが保育所の多くは年齢ごとのクラス編成で、他のクラスとの連携などないのが現状です。それでは子ども達は伸びません。（特に認定こども園になった園には大事なポイントです。）子ども達は、模倣したくてうずうずしています。部屋の仕切りも見直すチャンスです。興味あるところで立ち止まり参加できる園全体の保育者集団で子どもを育てる…といった今までとは違った保育環境、興味ある子を受け入れ共に活動し、その子のタイミングで担任に戻すというフレキシビリティが必要ではないでしょうか、子ども主体で対話的で深い学びにつながる大事な時期にも思えます。人間が生まれながらに持っている感覚を駆使して身近なさまざまなこと・ものに感じて、自分の内で考えたり思ったりして、そのイメージに基づいて行動してみるという「感じて・考えて・行動する」という行動こそAIを人間らしく活用できる未来を築く礎になるのではないのでしょうか。その原点こそが乳児から幼児期に体験的に学ぶ重要性だと考えます。